

文化 第78巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷  
平成27年3月25日発行

## 『論理学研究』における充実化の構造

越 後 正 俊

## 『論理学研究』における充実化の構造

越 後 正 俊

### 第一節 本稿の目標

前期フッサールの主著である『論理学研究』<sup>1</sup>における「直観」は独特の概念である。それはいわば「拡大された意味における直観」であり、いわゆる感性的直観に限定されるものではない。知覚のうちに直接その対象を持たない非感性的な対象性もやはり直観の対象であり、現に直観されているというのがフッサールの立場であった。

フッサールによれば、直観一般に関して、対応する対象を「それ自体 (selbst)」というあり方で、所与性へともたらすような様々な種類の意識のあり方、ないし直観する作用があるのである。つまり作用の種類に応じて対応する対象をそれなりに明証的に与える直観が存在するのだ。したがって感性的直観とは別に、算術的な対象や幾何学的対象に関する直観等々もまた、フッサールの言う「直観」に含まれることとなる。このとき、「それ自体」という様態を支えるのが「充実化」の構造である。

本稿はこのカテゴリー的直観の充実化のあり方を主題とする。そしてこのことを以下の手続きにおいて示す。第二節ではフッサールがどのようにして「カテゴリー的直観」という発想を抱き、また特にその充実化という問題に到達したのかを略述する。また第二節以降必要となるカテゴリー的直観の基本的な性格を感性的直観との対比で確認する。第三節で改めて本稿の主題である志向の充実化という現象の基本的な部分を確認する。それとともに、カテゴリー的直観における充実化を考える際に鍵となるカテゴリー的代表象の説を批判的に検

---

<sup>1</sup> 本稿で扱うのは『論理学研究』第二版である。なお本稿で『フッサール全集』に言及する場合、慣例に従いカッコの中に巻数をローマ数字で左に、ページ数をアラビア数字でその右に示す。

証する。第四節でカテゴリー的直観の充実化という発想を評価した上で、『論理学研究』にとって充実化はどう評価されるべきかを明らかにする。

## 第二節 感性的直観とカテゴリー的直観

フッサールは感性的直観とカテゴリー的直観の区別を、表現に対応する要素がどこに見出されるかという問題意識によって展開する。そこでまずはその議論に沿ってカテゴリー的直観の基本的な性格を確認する。

例えば「紙は白い」といった事態を考えてみる。これらの表現のなかには、感性的な知覚の内に対応するものが見つかるようなものもある。それが「紙」であり、また「(色としての) 白」である。これに対して「…だ (…である) (… sein)」といった表現の部分に関してはこれに対応する要素を、「紙」や「白」の場合のように知覚の内容のうちに直接見出すことはできない。「白である」ということを、同じようにして、感性的な知覚の内直接求めることはできないのである。このようにカテゴリー的形式とは、さしあたり表現の中で、感性的なものの中には、自らに対応する要素ないし対象の見当たらないような諸対象性のことだとされる。これを言い換えて、カテゴリー的形式は、感性的なもの内に対応する契機のないものであるとされるのである。

そしてこうしたことは「…だ (…である)」という表現にだけでなく、「そして (und)」、「一つの (ein)」、「もし…ならば～ (wenn … so ～)」などの表現全体について成り立つ。そこで、フッサールはこれらの要素を、「カテゴリー的形式 (kategoriale Form)」と呼び、感性的知覚のうちに対応物の見つかる、「質料的素材 (materialer Stoff)」と区別する。以上の事情を踏まえて「例えば、私が白い紙を見て、白い紙、と言う場合は、そうすることによって私は、私が見ているもののみを適切に表現して」おり、「全き判断の場合も事情は同じで、私はこの紙が白いという事態を見て、それをそのまま表現して、この紙は白い、と言表」<sup>2</sup>すると言われるのである。

しかし、カテゴリー的形式に対応するものが知覚のうちに直接見出すことができないとはいえ、われわれが実際にこれらの表現の違いを理解し実際に用いて相手に通じる以上、これらが意味のない表現であるとはまさか考えられな

<sup>2</sup> XIX/2, 659

い。そうである以上フッサールによればカテゴリー的形式のようなものを志向する作用もあるはずであり、こうした志向を充実する作用もまたなければならぬのである。こうしてフッサールの問題意識は、「意味のカテゴリー的形式は、[…] 狭い意味での知覚あるいは直観によって充実されるのでないとすれば、何によって充実されるのか」<sup>3</sup>と定式化されるのである。

こうしてフッサールはカテゴリー的直観とその充実化という基本問題に逢着する。さて充実化について詳述する前に今一点確認すべき性格がカテゴリー的直観には存在する。カテゴリー的直観には常に（究極的には感性的直観に<sup>4</sup>）基づけられた作用であるという点がそれである<sup>5</sup>。

知覚の対象はわれわれに対し直接与えられる。フッサールの言葉で言えば、「一撃で」与えられる<sup>6</sup>。まず知覚の対象に対する志向があり、次にその志向に合致するものが「直観的に」与えられるのがそのプロセスであり、知覚のプロセスはこれで完結している。この2番目プロセスにおいて志向の意味に合致する対象を「それ自体で」与える働きをするものが充実化の作用である。

これに対しカテゴリー的対象は、一連の基づける作用においてのみ与えられるものであり、一挙に与えられるものではない。フッサールによればこれらの基づける作用によって基づけられた作用は、基づける作用が志向していたのとは違った、新たな対象を与えるのである。これが感性的直観に対するカテゴリー的直観の特徴である。

カテゴリー的作用とは、結合したり、関係づけたり、区別したり、同一化したりするなどといった、対象との間にそれまでに存在しなかった新たな関係を見て取る作用なのである。カテゴリー的作用とは前もって与えられている志向的对象と、次々となんらかの仕方に関係させ、それらの対象をある一つのカテゴリー的観点の元で（例えば、「部分と全体」という観点から）、それまでに

<sup>3</sup> XIX/2, 669ff.

<sup>4</sup> 「事象の本性にあるのは、カテゴリー的なものは究極的には感性的直観に基づいているということである。そして、基づける感性を伴わないようなカテゴリー的直観なるものは、それえゆえまた、悟性による洞察や最高の意味での思考なるものは、矛盾しているという事実である。」(XIX/2, 712)

<sup>5</sup> この点もやはり周知の基本的なことだが、充実化を論じる際に重要な役割を果たすためここで改めて確認する。

<sup>6</sup> XIX/2, 673-675

はなかった、ある新しい統一をもたらす志向的作用のことだといえる。

またカテゴリー的作用は、総合された作用に「基づけられている (fundiert werden)」。これはカテゴリー的对象は、一連の基づける作用においてのみ与えられるという点から明白であろう。「基づけられている」とは、あるものが別のあるものなしには存在できないような仕方では存在しているということである。したがってカテゴリー的形式が与えられる場合は、これを与える作用を基づける「端的な知覚 (schlichte Wahrnehmung)」、ないしより低次の作用が存在するのでなければならないことになる。

ここまでで感性的直観との対比において、カテゴリー的直観の際立った特徴を確認したことになる。1点目は、カテゴリー的直観は、基づける作用を必要とする、基づけられたカテゴリー的作用によって成立する直観であるという点である。2点目の特徴は、カテゴリー的直観は、基づける作用によっては与えられていなかった、新しい対象に関係するものであるという特徴である。われわれは更に進んで、カテゴリー的な作用がいかにして端的な知覚に基づけられるのかを、「第六研究」の48節に即してより詳細に考察してみよう。

フッサールは、総合するカテゴリー的作用を遂行するプロセスを、三つの段階に分けて分析している。第一の段階では、対象を一つのものとして、分節されていない仕方では、一目で把握する。この際に遂行されている作用は、全体としての対象そのものに向けられた、端的な作用である。フッサールはこれを「全体的な知覚 (Gesamtwahrnehmung)」と呼ぶ<sup>7</sup>。この場合、その対象に含まれる諸々の部分は志向されてはいるが、表立って志向されているのではなく、含蓄的に志向されているにすぎない。

第二の段階は、第一の段階ではまだ含蓄的に志向されているに過ぎなかった諸々の部分が徐々に際立ってくることにより、作用主体の関心を惹く段階である。この段階において対象の各部分が改めて志向されるのである。こうした形で対象を客観化する作用を、「分節作用 (gliedernde Akte)」という<sup>8</sup>。この段階になって初めて、それまで含蓄的ではなかった対象の各部分が、明示的な対象となることのできるのである<sup>9</sup>。注意すべきは、この段階で何か新たな対象

<sup>7</sup> XIX/2, 680

<sup>8</sup> XIX/2, 681-682

<sup>9</sup> XIX/2, 682

が突如現れるわけではない、という点である。対象そのものについて言えば、対象は分節作用を遂行する以前のままでの対象である。

第三の段階では、分節する特殊な知覚の対象を、新たなカテゴリー的直観において、志向する。この段階で、基づける作用相互の対象の間に新たな関係をうち立てたり、あるいは一つの全体としての対象を捉える端的な作用の対象と、その独立的な諸契機を捉える作用の対象との間に新たな関係をうち立てたりすることができる。こうした関係を立てるのは基づけられた作用であるが、この作用においてカテゴリー的關係に関わる成分も、それに応じて、新たな性格を帯びる。こうして三つの段階を経ることで、カテゴリー的な作用は遂行されるのである。

したがって、カテゴリー的作用を、知覚とは別な種類のものでありながら、やはり同じく知覚の対象に関する端的な作用でしかないと考えてはならないのである。カテゴリー的作用が、「様々な作用性格に基づけられると同時に、それらの作用性格を抜きにしては考えられないような、ある新たな作用性格」<sup>10</sup>をもつのであるということの實質は、概略以上ようになる<sup>11</sup>。

### 第三節 志向の充実化

第二節ではフッサールの分析枠組みが、必然的にカテゴリー的直観とその充実化という問題に行き着くことを確認した。改めて充実化の一般的な性格を確認し、充実化の際にいかなる事態が生じているか確認しよう。

「合致」と「背反」という事象を巡るフッサールの分析を見てみよう。背反が起こる場合に関して第六研究第12節では次のように分析されている。ある志向 $\Theta$ がそれ以外の充実される諸志向 $\alpha, \beta, \gamma, \dots$ などと組み合わせあって、 $\Theta$ に反する部分を持った別な志向 $H$ において幻滅させられる場合を考える。このような場合 $\Theta: \alpha, \beta, \gamma, \dots$ と $H: \alpha, \beta, \gamma, \dots$ との間で、純粋な

<sup>10</sup> XIX/2, 678 を参照。フッサールはカテゴリー的对象性のうち代表的なものとして「事態」と「集合」の二つを考えていた

<sup>11</sup> 基づけ関係、およびカテゴリー的直観一般に関する見通しは、[Lohmar 2002] が全般的で明快である。またカテゴリー的形式相互の基づけ関係に関する研究としては [Haddock 1987] が批判的な見解として参考になる。

「予期外れ (Enttäuschung)」が起こりうる。このような純粋な予期外れが起こる条件としては、 $\Theta$ やHをも包括するある全体に対する志向Gが顕現しない場合であるか、あるいは少なくとも主に $\Theta$ とHが顕現し、両者が背反するという意識が志向 $\Theta$ と志向Hを統一する場合であるとされる。

具体例に即して考えてみよう。今、庭の外の鳥を眺めているとする。そして、 $\Theta$ を「セグロセキレイである」という志向、Hを「ハクセキレイである」という志向とし、それを構成するより部分的な志向 $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、…を「羽をもつ」、「短い脚を持つ」、「白黒の体毛である」などの志向であるとしよう。外の生物を眺めている際、それが鳥らしい外見をしていれば鳥であるということまではわかる。しかしそれがセグロセキレイであるかハクセキレイであるか、つまり一方の志向 $\Theta$ が当てはまるのか、他方の志向Hが当てはまるのかということになると細部の部分志向に立ち入ってみるしかない。ここでいえば（当然ながら）志向 $\alpha$ 「羽をもつ」、志向 $\beta$ 「短い脚を持つ」、志向 $\gamma$ 「白黒の体毛である」という部分までは問題なく確認され、かつ $\Theta$ とHとが両立しうる状態にある。そして志向 $\delta$ 「眼から頬・肩・背にかけてすべて黒い」を確認するに至って志向 $\Theta$ が成り立ち、志向Hが成り立たないことを確認する。すると志向 $\Theta$ が充実されと志向Hが幻滅したことにより、両者に対して背反という新しい関係が成り立つ<sup>12</sup>。その上で「セグロセキレイでありハクセキレイでない」という志向が成り立つのである。

また志向 $\Theta$ ： $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、…はより全体的な志向Gを伴うもの（ $G(\Theta$ ： $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$ 、…))である場合も考えられる。例えば先の庭の外を見ている場合の事例で、志向 $\Theta$ とHがより全体的な志向であるG「庭に鳥がいる」という顕現する志向を伴う場合が当然考えられるということである。上で上げた事例はこのGがはっきりと意識に上らないか、全く考慮されない場合を問題にしていたのである。<sup>13</sup>

われわれはこのようにして重層的な志向的生のうちで生きているのであり、これは志向される対象が知覚の対象であれ、あるいはより形式的・概念的な対象であれ同様である。特に背反が $\Theta$ レベルで起こること、その際にGは顕現していないかあるいは特に注意されることなく措定されたまま、いわば保存され

<sup>12</sup> この「新しい作用」に関しては本稿第二節を参照。

<sup>13</sup> 以上「背反」の事例に関して XIX/2, 577-580

るという指摘は重要である。<sup>14</sup>

感性的直観における充実化では、現実の感覚的对象に臨むことによってこのようなことが起こると考えられる。しかし、同じ構造をカテゴリー的直観に対してもそのまま適用しようとするとなだちに問題が生じる<sup>15</sup>。なぜならカテゴリー的に直観される成分の対象の側における相関項は、感性的直観の対象のような形では現実に見つけ出すことができないからである。フッサールはこの問題に答えるためにある説を提案した。それが「カテゴリー的代表象 (kategoriale Repräsentation)」の説である。この説はフッサール本人の自己批判も含め数多くの批判に曝されてきた。その点も含め、以下ではこのカテゴリー的代表象の説を検討することでフッサールがカテゴリー的直観において充実化という事柄をどう考えていたかを考察する。

フッサールは直観のカテゴリー的な作用はそれがどのような種類のものであれ、(1) 性質、(2) 志向的質料 (統握意味)、そして (3) 代表の 3 つの側面を持っているとする。そしてこの前提から主題となる疑問をひき出して見せる。知覚の場合は質料と代表の違いは明確だが、カテゴリー的作用の場合、それらは代表を持たず代表はそのカテゴリー的作用を基づけている何らかの作用のうちに

---

<sup>14</sup> なお問題を個別の知覚対象から判断レベルへと議論を移行させるためには、本来フッサールの「形式化 (Formung)」概念に触れる必要がある。内的な関係とは、「A は a である」とか、「A は a をもつ」とか、あるいは「a は A に内在している」といった、ある対象全体とその部分との関係を主題とする関係のことである。しかし、判断作用の対象として「事態」というものを一般に考えるなら、内的な関係を考察するだけでは不十分なことは明らかである。広い意味での「事態」には、内的関係だけでなく「A は B の右にある」とか「A は B に隣接している」といった外的関係や、「A と B」とか「A あるいは B」といった集合体と離接体 (を含む分枝) も含まれる。したがって、知覚レベルの議論から判断レベルの議論へと移行するには、これらがいかにして形成されるかを考察せねばならない。まず外的関係の場合だが、フッサールの議論は実は大筋において内的関係の場合と変わらない。外的関係は常に、「同じ一つの全体に属する諸部分相互の関係」(XIX/2, 683) において成立し、「A」と「B」、および「A と B の関係」(「A は B に隣接している」場合の「隣接関係」にあたるもの)、そしてこれら三つの表象を「形式化し (formen)」結合する作用によって形成される。外的関係もやはり、「基づけられた作用において一次的に現出する」ものであり、この点も内的関係と変わらないとされる。

<sup>15</sup> [Tugendhat 1970]S. 118, [Rosen 1977]S. 58-59



しかないということになってしまう。これは3つの前提に反するというわけである。

しかしフッサールは、代表が（カテゴリー的直観をも含む）直観全体にとって本質的なものであるという立場を崩さない。そこでカテゴリー的代表象 (kategoriale Representation) の概念が要請されるのである。空虚であるということと充実化されていることとの相違はまさに代表の有無に左右されるのであり、代表こそが充実を与えるというのが『論理学研究』におけるフッサールの立場であった。カテゴリー的直観においても空虚な表意とその充実という区別は当然存在している。したがって単に対象を「表意的に (signitiv)」志向する作用も、それと並行して同じ対象をそれ自身として現前化する作用もカテゴリー的に直観するという事態のうちに含まれていることになる。しかし両者の作用の志向的質料が同じである以上、カテゴリー的直観についても、新しい対象を構成する成分が他ならぬ代表象であり、対照的なものを内容的に（質料的にではなく）提示し、体験された内容を思念された対象の代表として統握するのだと理解せざるを得ない、としている。

しかし周知のように、実際にはこのカテゴリー的代表象の思想は厳しくその矛盾を指摘されてきたし、フッサール自身もこの考え方に対し仮借ない自己批判を加えている。代表を作用の「心理的紐帯」として理解し、それをそのままカテゴリー的作用にも当てはめて考えたことがカテゴリー的代表象の説の難点となっていることはよく知られている。この難点を解消するためにトゥーゲントハットは、単に思念されただけの表意的な作用はそもそも遂行されていないのだと理解した<sup>16</sup>。しかしそうだとすると「遂行されていない作用」の実態が不明になり、またフッサール自身の主張にも反するという問題点があった<sup>17</sup>。内容としての空虚な代表が存在していてそれがあつたために充実化のはたらきが生まれるということは、カテゴリー的作用についても成り立つ<sup>18</sup>というのが『論理学研究』におけるフッサールの立場だったのである。

カテゴリー的代表象の議論はこのように批判されるが、同時に注目すべき特徴も備えている。それは基づける作用との連関が強く意識されているというこ

<sup>16</sup> [Tugendhat 1970], S. 125

<sup>17</sup> [Rosen 1977], S. 67-71

<sup>18</sup> XIX/2, 700

とである。カテゴリー的作用についても代表象が成り立つという主張に続けてフッサールは次のように言う。「しかし代表象することは基づけている様々な作用においてのみ遂行されるのではない。言い換えれば、基づけている様々な作用の対象が現前化されているだけではなく、事態全体つまり全体的総体が現前化されているのである。」(XIX/2, 700)ここにフッサールの代表象に関する立場が要約されている。つまり本節の冒頭で確認した充実化の構造がカテゴリー的作用についても成り立ち、そこでは新たな対象として事態全体が現前化されているということ、この関係を保証するものとして基づける作用・基づけられる作用両者に対して代表が考えられねばならないということである。この点は『論理学研究』の大きな特徴となっている。代表象の説を批判してこれを除去するのも一法だが、そのときは再びこの事態全体がどのように志向され充実されているのかが問題となろう。

#### **第四節 充実化というアイディアに対する評価**

充実化という構想に対して評価を下す前にまずカテゴリー的直観はどのような意味において直観であるといえるのかという基本的な点に関して言及しておく必要がある。この点については既に紹介したトゥーゲントハット<sup>19</sup>とローゼン<sup>20</sup>以来議論がなされている。彼らのうち特にトゥーゲントハットはカテゴリー的直観も確かに直観と呼べるその理由を、総合作用の顕在的な「遂行 (Vollzug)」というカテゴリー的直観のあり方に求めている。彼のこの主張には、たとえプロセス的で行きつ戻りつすぎるごちないものであってもカテゴリー的直観もやはり直観なのだと認めるべきだという立場が鮮明にされている。感性的直観のように短時間のうちに端的に対象を把握するという我々にとってなじみのある直観概念から解放されるべきだとフッサールとともに主張するのである。しかしトゥーゲントハットの主張には全面的には同意しがたい。いかにしてカテゴリー的直観の直観性を確保するかは今後の課題であろう。

充実化は一定の分節を備えた、知覚的な対象や事態を分析するためには極めて有力な手立てであるといえる。既に見たように意味志向と意味充実という枠

<sup>19</sup> [Tugendhat 1970], S. 126f.

<sup>20</sup> [Rosen 1977], S. 65-71

組みで論じられる充実化という現象は、知覚的事態を分析のベースにしている関係から、そもそもの発想から知覚的事態と親和性があるのだ。

他方で形式的対象性をも含めたカテゴリー的直観の充実化という点になると本稿で見た通り問題含みである。ここに伏在する問題点の解決なしには、『論理学研究』の「プロレゴメナ」における問題設定が適切に解決されているかといった基本的なことできえも評価ができなくなってしまう。

「プロレゴメナ」の課題は、一面では論理学のイデアルな性格を強く表明することにあつた。なぜなら、学問一般の構造を支えているもの、すなわち「純粹論理学 (reine Logik)」が、われわれのリアルな思考作用を根拠としているとすれば、それは必然的に懐疑主義に行き着いてしまい、学問一般の客観性を保つことができないと考えたからである。この「純粹論理学」には、「形式」や「概念」、「真理」等々が含まれており、また主語形式、離接的結合や、あるいは演繹形式、仮言命題<sup>21</sup>などの、「基本的結合形式 (elementare Verknuepfungsformen)」も含まれる<sup>22</sup>。これに加え「統一 (単位)」、「対象」なども純粹論理学に含まれる形式的な概念である。

フッサールは確かに、このような「純粹論理学」の総体を、主観的なものに左右されない形で、客観的なものと主張した。しかし、「プロレゴメナ」の課題はそれの留まらなかったのである。フッサールは更に進んで、純粹論理的なものも直観において確認されねばならないと考えたのである。今や、フッサールは自らの課題を次のように主張するのである。

「これらすべての概念〔主語形式、対象など〕を確定すべきであり、それらの『起源』を個別に探求せねばならない。〔…〕問題なのは現象学的起源、あるいは〔…〕当該概念の本質を洞察することである。われわれは十全的な理念化において本質を直観的に現前化することによってのみ、〔…〕この目標に到達することができるのである。」(XVIII, 246)

本稿が問題とする『論理学研究』の「第六研究」は、まさに「プロレゴメナ」のこの課題に答えるものとして構想されたのである。しかし、この課題が

<sup>21</sup> XVIII, 245

<sup>22</sup> XVIII, 244-245

どの程度解決されているかということとはまさに、カテゴリー的形式が充実されるとはどういうことかという問いにどれだけ答えることができているかに他ならない。代表象の問題は代表象を除去して終わりではない。事態全体がどのように志向され充実されるのかが問われねばならない。そのとき我々は上の課題に適切に答えることができるだろう。

### 文献表

Haddock, Guillermo E. Rosando. "Husserl's epistemology of mathematics and the foundation of platonism in mathematics." in *Husserl Studies* Vol. 4, No. 2, Dordrecht: Martinus Nijhoff, 1987, pp. 81-102.

Husserl, Edmund. *Logische Untersuchungen. Erster Band: Prolegomena zur reinen Logik*. herausgegeben von Elmar Holenstein, Husserliana XVIII, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1975. [立松弘孝訳『論理学研究』1、東京、みすず書房、1968]

— . *Logische Untersuchungen. Zweiter Band: Untersuchungen zur Phaenomenologie und Theorie der Erkenntnis*. Zweiter Teil, herausgegeben von Ursula Panzer, Husserliana XIX/2, Den Haag: Martinus Nijhoff, 1984. [立松弘孝訳『論理学研究』4、東京、みすず書房、1976]

Lohmar, Dieter. "Husserl's Concept of Categorical Intuition." in *One Hundred Years of Phenomenology: Husserl's Logical Investigations Revisited*, *Phaenomenologica* 164, Dordrecht: Kluwer, 2002, pp. 125-145.

Rosen, Klaus. *Evidenz in Husserl's deskriptiver Transzendentalphilosophie*. Meisenheim am Glan: Anton Hain, 1977.

Tugendhat, Ernst. *Der Wahrheitsbegriff bei Husserl und Heidegger*. 2. unveränderte Auflage. Berlin: Walter de Gruyter & Co., 1970.

## The Structure of Fulfillment in *Logical Investigations*

Masatoshi ECHIGO

In *Logical Investigations* Husserl says that intentions aim at its object in thought and the originally giving intuition gives them intuitive content. This relationship between intention and fulfillment is one of the main theme of the sixth investigation. As long as we tackle perceptual object, this structure is valid. When it comes to formal mathematical object, though, the idea of fulfillment leads to some difficulties. This paper deal with the structure of fulfillment and its problems.

In section one, general character of categorical intuition and meaning of the word “categorical” is taken up. It is confirmed that categorical intuition has founded character. In section two, how sensible object and categorical object is fulfilled is dealt with. I remark there that the structure of fulfillment is analyzed based upon the case of sensible objects. In section three, the difference between the fulfillment in the case of formal object and of the perceptual object is taken up. Unlike the perceptual object, the formal object is intuited in segmenting process, and I give a detailed account of it. In section four, I evaluate the scope of the idea of the fulfillment, and meaning of the idea that counts in *Logical Investigations*.